

私立大学図書館協会 2015年度西地区部会研究会レジュメ

研究発表1

「大学図書館でいかにアクティブラーニングを深化させるか？」

梶山女学園大学図書館 天野由貴

平成26年3月に新たに誕生した本学のラーニングコモンズ iサークルは、授業時間外において、学びのプロセス全体を学生自らが計画し運営できる学修環境を提供することを目的に、次の3つの目的で創出した。その目的とは、① 学生が課題の発見と解決のための基礎的な知識技術を習得する場、② 個人や集団の中で能動的に課題解決を図る能力を身につける場、③ 主体的かつ協調的な学び手、働き手を育成する場である。

このような学修環境を実現するための方法として、26年4月から、従来行っていた「図書館ツアー」および「データベース講座」を発展させた、学修支援プログラム(*Sugiyama Study Support Program: 3S*プログラム)の実施と、10月からは、その学修支援プログラムを補完する個人向け学習支援プログラム「レポ探」を開始した。学修支援プログラムは、ゼミ単位での申込による授業時間内の実施、個人向け学習支援プログラム「レポ探」は、学生個人または少人数での申し込みによる、学生の知的要求に対応したプログラムである。

このプログラムの実施結果と、その後の学生の学修行動を、図書館内でのタブレット利用状況等から見た学修行動によって、学修支援サービスが学生の主体的で能動的な学びをどのように促進し深化させているのか分析を試みる。

その結果から、「梶山女学園大学教育改革」の重要な項目であるアクティブラーニングを深化させるための要件とは何か明らかにし、図書館を全学的な教育の質を高める拠点のひとつとするために必要な条件を考察する。

薬学図書館からの情報提供

北陸大学図書館薬学部分館

田邊 良和

平成 22 年 12 月に文科省からの「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像」において、大学図書館に求められる機能・役割として学修支援や研究活動に即した支援と知の生産への貢献が求められている。

しかし、本学図書館の現実には、学生が単に勉強をするために活用する自習の場となる危険がある。図書館から学生及び教員への情報提供を行うことにより、学生が学修の場として図書館を活用し、学力向上に繋がるような図書館からの学修支援について考えたい。

主として、薬学図書館が学生及び教員に学修支援の一環として日常的に行っている情報提供について次の事例を主として発表したい。

なお、アクティブラーニングやラーニングコモンズについては学部の特殊性および、昨今取り組みをはじめたばかりのため、詳細は割愛させていただくことを予めご理解いただきたい。

- 1、読書推進への取り組みについて（読書感想文コンクール他）
- 2、参考図書・推薦図書・卒業記念寄贈図書の選書および配架の工夫について
- 3、レファレンスサービスについての図書館スタッフの取り組みについて
- 4、薬学部生には欠かせない OPAC 以外の検索ツール「医中誌 Web」について
- 5、教員の論文を発信する機関リポジトリについて
- 6、時代の流れで欠かせない電子ジャーナルについて

関西大学総合図書館ラーニング・commonsについて

関西大学図書館 広瀬 雅子

関西大学図書館は昨年平成 26 年（2014 年）に図書館創立 100 周年を迎え、今年には総合図書館開館 30 周年という節目の年となっている。その 4 月に、総合学生会館凜風館 1 階のコラボレーションcommons、IT センター内のサテライトステーションに続く学内 3 番目の施設として、待望のラーニング・commonsが総合図書館内に開設されることとなった。設置された場所は元々図書館の事務室として設計されたエリアだったが、図書館を取り巻く様々な状況の変遷を経て、学生の主体的な学習の場として生まれ変わったのである。

貸出用ノート PC、プロジェクターや、ホワイトボードなどを利用してグループ学習ができるラーニング・エリア、数人から十数人用の個室で発表準備なども可能なワーキング・エリア、大学院生の TA により文章作成についての指導が受けられるライティング・エリアに加えて、ワークショップ・エリアは大型スクリーンを備えたスペースで、ガイダンスやワークショップなどが行えるようになっている。

commonsは開設されたばかりにもかかわらずかなりの盛況で、時間帯によっては、9 室あるワーキング・エリアの個室とラーニング・エリアが満席になることも多い。グループ学習を行えるスペースへの需要が大きかったことがうかがえる。

施設が完成した今、総合図書館ラーニング・commonsを学生にとってよりよいスペースとして育てていくためには何をすればよいのか、図書館にあることの利点をどう活かしていくかが、次の課題となっている。

「英国の図書館における学習環境と利用者支援」

長崎外国語大学 教育研究メディアセンター
マルチメディアライブラリー 羽田 有花

世界の中でも質の高い教育を誇る英国の図書館の事例を通し、図書館における学習環境として理想的な設備と利用者支援について考える。

近年、英国では政府の方針や不況の影響で、学術図書館を含めた図書館全体の数が年々減少傾向にある。しかし、このような状況に直面し、伝統的な設備や資料を工夫して使いながら、利用者支援の改善を積極的に行っている図書館も数多く存在する。本発表では、大学図書館の例として University of Cambridge 内のカレッジ図書館、学部図書館、中央図書館を挙げ、公共図書館の例として Saffron Walden Town Library を取り上げ、これらの図書館におけるハード面とソフト面の関係やそのバランスに注目する。ハード面については、英国の伝統的な図書館の構造、貴重図書の管理・利用等の資料一般について、ソフト面については新たに取り入れられているサービスや利用者支援の方法を中心に紹介し、その二つの面がどのように学修支援に活かされているかを考察する。また、そのハード面とソフト面の双方が効果的に機能するように利用者支援を行う図書館司書のスキルも非常に重要であると考え、学修支援に従事する図書館司書へのインタビュー内容も紹介する。このインタビューを通し、英国の図書館司書の日常を知るだけでなく、支援の工夫やその成果などを学びとり、それぞれの図書館で実際にどのような取り組みが可能かを例示したい。